

【2014 年度 岐阜大学サマースクール(受入) 総括と今後の課題】

8 週間コース参加学生	ルンド大学(スウェーデン)	17 名
4 週間コース参加学生	木浦大学(韓国)	4 名
	計	21 名

第 27 回を迎えた今年度の岐阜大学サマースクール(受入、以下略)は、上記の 21 名を迎えて 8 週間コース、4 週間コースそれぞれを実施した。ルンド大学では、本サマースクールプログラム参加希望者が 41 名に上り、3 月に行われた同大学日本語学科の中間試験の結果上位者から選抜された。希望者数の多さは、参加経験者の口から本プログラムの魅力が在学生に伝えられているからこそであろう。多くの学生に希望してもらえることを光栄に思う。木浦大学については 5 名の定員で募集したが、参加学生は 4 名に留まった(この理由として、JASSO 奨学金の受給者数が影響したと思われるが、この件については後述する)。

今年度 8 週間コースは、6 月 2 日(月)から開始し、4 日(水)に開講式およびガイダンスを行なった。日本語授業等の実際のプログラムは、翌 5 日(木)から開始した。4 週間コースは、6 月 25 日(水)に開講式およびガイダンスをし、翌日から授業等に加わった。

プログラムには、以下の内容が盛り込まれた。後掲の日程表を参照願いたい。

1. 日本語授業:毎週月～木曜午前(8:45～12:00)
2. 日本事情／文化講義・実演:全 3 回実施(能楽事前講義 7/2、能楽ワークショップ 7/2、上高地等一泊旅行事前講義 7/2、相撲講義 7/16)
3. エクスカーション:美濃 6/12、土岐 6/23、相撲 7/17
4. 旅行:上高地・白樺湖・松本・妻籠宿 7/3～4、郡上 7/11～14
5. その他講義:ホームステイ事前指導 7/7

これらの他に、ガイダンスや修了式等の行事を執り行った。以下、今年度の総括と次回以降の課題等を、学生からのフィードバックを参照しながら述べる。

学生フィードバックは、筆記アンケート(7/21 配付、7/23 回収)とまとめの会(反省会、7/23 実施)での口頭アンケートから得た。筆記アンケートは、過去の年度との比較のため、質問項目を大きく変えずに毎年度実施している。それに対して、まとめの会の口頭アンケートは、その年度に特有の事柄に特化して深く尋ねるものが含まれている。筆記アンケート集計結果全体は別に示す。また、適宜 JASSO 奨学金(後述)学生報告書作文も参照した。

I 日本語授業

今年度の参加学生の日本語レベルは、昨年度に比べると高く、学習態度や生活態度も落ち着いていた。そのため授業自体は進めやすかったが、よく考え冷静な判断をしてアンケートに回答しているため、その結果は例年よりも若干厳しめである(日本語授業に関する項目のみならず、全体的に要改善を指摘するコメントが見られる)。厳しめの結果が出ることは、本プログラムの伸びしろを示していることであるので歓迎する。

日本語授業に関して厳しい指摘があったのは、使用教科書である。今年度は昨年度同様に『中級までに学ぶ日本語』(研究社)を月・火に、『WEEKLY J book 1 日本語で話す 6 週間』(凡人社)を水・木に使用した。昨年度も前者の評価はいまひとつで後者が高評価であったが、今年はより顕著にその結果が出た。口頭アンケ

ートで教科書別に「来年のサマースクールでも同じ教科書を使ってよいか」を尋ねたところ、前者については「いいと思う:5、よくないと思う:16」であり、後者は「いいと思う:18、よくないと思う:3」であった。2年連続でこのような結果が出たということは、『中級までに学ぶ日本語』は本プログラムで用いるには適切ではないと言わざるを得ない。学生がこの教科書を好まない理由は難易度によるものではなく(筆記アンケートでは「少し難しかった:8、ちょうどよかった:7、少し簡単だった:6」と回答が分散している)、教科書の形態によるものと推察される。自習したいのに英語の説明がない、漢字が多くて読めない(読みにくい)、トピックが魅力的ではないといったコメントがあった。教科書選定は来年度の重要な課題とする所存である。

教科書の選定と関連して苦慮するのが、新しい事柄をどこまで教えてよいかということである。最大数の参加学生を送っているルンド大学からは、次の学期にサマースクールに参加した学生と参加しなかった学生がともに日本語授業を取るの、サマースクールで新しいことを勉強してきて両者に差が生じるのは困る、新規事項の学習ではなく復習をしてほしいという要望が寄せられている。本プログラムではその要望を汲んで初級から中級への橋渡しとなるような復習を内容としているが、このことが参加学生には「新しいことを学べない」という不満につながっている。この不満が今年度は顕著であった。「新しいこと」をどうとらえるかという問題もあるだろう。初級日本語クラスでは毎週新出文法をきっちり学んでくるため、既出文法の組み合わせや、それらを活用する作文や会話などでは、「新しいことがない」と感じるのかもしれない。次年度以降は、新しい語彙や漢字を授業に盛り込むという視点も可能であろう。

昨年度試行し反応が肯定的であった筆記試験を今年度も実施したが、今年度については「試験があったほうがいい:11、ないほうがいい:10」(口頭アンケート)と結果が二分された。コメントを分析してみると、試験そのものに難色を示しているわけではなく、実施のタイミングが良くなかったという意見があった。今年度は7/16に試験を実施したが、7/11~14に3泊4日の郡上ホームステイがあったため、試験勉強ができなかったという意見である。試験前に勉強したいと真面目に考えた参加学生がいたわけである。来年度はこの意見を尊重して試験日を設定したい。

日本語授業に関して、今年度新たに試みたのは、日本人学生およびサマースクール以外の学生との合同授業の実施である。岐阜大学の全学共通教育科目の「言語学入門(日本語学入門)」は、学部所属の正規生である日本人学生・留学生と留学生センターの日本語研修コースCレベルの学生が履修しているが、この授業に1回のみサマースクールの学生が加わった。授業ではさまざまな国籍の学生が混在するグループを作り、与えられたトピックで話す活動をした。口頭アンケートでは14名がこのような授業があったほうが良いと回答しており、概ね好評であったと言える。実施回数の希望は、1回が7名、2~3回が5名であった。次年度もスケジュールの調整が可能であれば、同様の授業を行なう価値は十分あると考えている。

反省点をもう1点挙げる。本プログラムは、後述するように独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)の海外留学支援制度(短期受入れ)の奨学金に採択されているが、プログラム終了時にJASSOに提出する学生の報告書を日本語で書くことにし、それを授業の中で作文課題として扱っている(同報告書は英語または日本語での執筆が求められている)。今年度の学生はそれぞれが熱心に真面目に、そして鋭く改善を指摘しつつ報告書を執筆しており、活動自体に問題はないが、21名の学生の文章を限られた時間でチェックすることが難しかったという授業担当者からのフィードバックがあった。本件に限らず、適切に授業スケジュールを調整する必要がある。

Ⅱ 日本事情／文化講義実演

日本事情／文化講義実演としては、能楽ワークショップ、能楽ワークショップの事前講義、一泊旅行(上高地・白樺湖・松本・妻籠宿)事前講義、相撲観戦の事前講義を行なった。また、郡上プログラム前には、ホームステイに際して留意すべき点等についてガイダンスを実施した。

能楽ワークショップは、岐阜大学留学生センターが誇る「本物に触れる」日本文化体験行事の筆頭である。能については 2005 年度から、狂言については 2007 年度から、観世流シテ方味方團先生・同田茂井廣道先生(能)、大蔵流狂言方山口耕道先生・同茂山良暢先生(狂言)、以上 4 名の学外講師をお招きして毎年ワークショップを実施している。開始当初はサマースクール行事のひとつであったが、その充実した内容と楽しさから、現在では留学生センターが全学の学生、教職員を対象に実施する行事に育っている。今年度初の試みとして、能と狂言のワークショップを同日開催、すなわち 4 名の先生に一堂に会していただき、能と狂言を比較しながら学ぶ機会となった。能と狂言を合わせて実施するのは初めてだったため、果たしてうまく運営できるか若干の不安を感じて当日を迎えたが、先生方の巧みな進行により、想定以上の成果となった。本ワークショップは「平成 26 年度岐阜大学活性化経費(教育)」を得て、留学生センター行事「留学生と日本人学生のための日本文化ワークショップ(郡上踊りと能楽)～踊って、謡って、体験して～」の一部として実施しているため、詳細は岐阜大学留学生センターホームページおよび『岐阜大学留学生センター紀要 2014』を参照されたい(郡上踊りワークショップは 5 月に実施済)。

能楽については、過去に授業形式で講義を設けたことがあったが、ここ数年は実施していなかった。今年度は能と狂言が同日実施ということで、両者の違い、さらに言うと歌舞伎と能や狂言の違いも知らない学生もいることが予想されたため、能楽の基本の基本を学ぶ事前講義を行なった。この講義はアンケートで全員が「ふつう」以上の評価をしているため有益であったと思われる。話だけでつまらない、もっと映像を使ったほうが面白いというコメントがあったが、ワークショップで初めて現物を見る感動を味わってほしいため、事前講義であまり映像を見せすぎないようにしたいという思いもある(たとえば、能面を何種類も事前に映像で見せることは避け、ワークショップで生の面を見てほしいと思う)。単に能楽の知識を与える授業ではなく、ワークショップの魅力を増すもの(減じないもの)として改善の方策を探りたい。

事前講義としてもうひとつ今年度新設したのは、上高地等への一泊旅行の事前講義である。従来は、事前学習の時間を設けずに旅行に出発させていたが、昨年度の事後アンケートで行く場所についての説明があったほうが良いという意見があったため、今年度試行した。口頭アンケートで事前講義の有無を問うたところ、「あったほうが良い:16、なくてもいい 3(無回答:3)」であった。簡略を旨として訪問先のポイントを示すことは有益であったと考えている。

相撲事前講義は、例年通り好評であった。今年度は能楽と一泊旅行の事前講義を追加したため、結果的に日本事情講義が増加した。日本語と日本文化をバランスよく教授するという本プログラムの目的に合致する方向性であると考えている。

Ⅲ エクスカーション・旅行

本プログラムの重要なコンセプトのひとつが地域密着型志向である。県内については美濃、土岐、郡上の各プログラムがあり、近県においては上高地等への一泊旅行、大相撲名古屋場所観戦がある。それぞれの内容は以下の通りである。

- ・ 美濃エクスカージョン:午後からの日帰りプログラムで、浴衣の着付けと和太鼓体験を実施。
- ・ 土岐エクスカージョン:午後からの日帰りプログラムで、陶芸体験(轆轤及び絵付け)を実施。
- ・ 郡上プログラム:郡上八幡国際友好協会(GIFA)、郡上市役所はじめ郡上の皆様のご協力を得て、3泊4日で実施。文化体験(小学校訪問、書道、郡上踊り、茶道、剣道)とホームステイ。
- ・ 一泊旅行:上高地、白樺湖、松本、妻籠宿を回る。前者2地点で日本の自然を、後者2地点で日本の歴史を堪能する。
- ・ 大相撲名古屋場所:生で相撲を観戦する。

上記のプログラムは、それぞれ度重なる検討、紆余曲折を経て現在の形に概ね定まりつつあるが、一泊旅行については上記の訪問先にして今年度で3回目と歴史が浅いので、今回学生から丁寧に意見を聴取することにした。

一泊旅行の訪問先は、過去には京都、高山・白川郷であったが、前者は学生が自力で行くケースが増えたこと、後者は一泊旅行の後に行なわれる郡上プログラムでホストファミリーが連れていくケースがあることから変更し、2012年度から上高地・白樺湖・松本・妻籠宿(2012, 2013年度は馬籠宿)という信州をメインとした訪問先としている。移動距離が長すぎることを指摘するコメントが昨年度あったため、今年度は事前講義の折に、移動距離をどう感じるか、サマースクールに一泊旅行を組み入れる必要があるかを考えながら旅行に参加してほしいと依頼した。それらについてまとめの会で尋ねた。

今年度の学生の意見をまとめると、以下ようになる(カッコ内が口頭アンケート結果)。サマースクールに旅行を組み込むことは必要で(旅行があったほうがいい:21名全員)、バスの移動時間が長いと感じる学生もいるが(バスの時間が長すぎた:9名)、今年度の訪問先はだいたい良かった(来年も同じところに行っていと思う:18名)。この結果を踏まえると、来年度からしばらくは現在の訪問先で様子を見るということで良さそうである。学生の意見を詳しく聞いたことは有益であった。

郡上プログラムは、今年度も郡上八幡国際友好協会(GIFA)の皆様のご協力を得て実施した。文化体験講座の企画・実施、ホストファミリーの募集等、大変お世話になった。特に今年度は、ホストファミリーのマッチングで多大なご迷惑をおかけしてしまった。ホストファミリー決定後、1名の学生が、自分はひとりではホームステイしたくない(できない)、他の学生といっしょにホームステイしたいと言い出したのである。過去には、複数でのホームステイとなった学生が、ひとりでしたかったとクレームを出したことはあったが、その反対のパターンはなかったので全くの想定外であった。学生のわがままと受け取られても仕方がないこのような事態に、プログラム前日にも関わらずご対応いただいた GIFA の皆様、ホストファミリーの皆様にはお詫びとお礼を申し上げます。ほかない。

このような手厚いご対応をいただいた郡上プログラムは、当然のことながら今年度も大変好評であった。その中であえて今後への要望として挙げられたコメントとして、2点記載しておく。1点目は、文化体験のひとつの剣道講座についてである。同講座を今年度初めて参観したが、専門用語などの語彙が難しかったり、剣道に興味のある者は嬉々として竹刀を振っていたが、そうではない者は手持ち無沙汰にしていたり、全体としての統一感は薄いという印象を受けた。2点目は、ホストファミリーへの要望である。喫煙者家庭にステイした学生の臭いについての言及、英語使用が多かった家庭への不満である。前者については、事前アンケートでできるだけ禁煙家庭を希望する学生の要望を反映しているが、個人の嗜好に関することであるため、完全な対応は保障できない。一方、後者についてはホストファミリーの皆様にご理解をいただくことで改善は可

能ではないかと考えている。これらの課題については、来年度の郡上プログラム実施の際に、GIFA の皆様と検討させていただきたい。

IV その他

上述のⅠ～Ⅲ以外で今年度の新規事項や特記事項を以下に列挙する。

① 役員昼食会の再開

本サマースクールは、国際戦略本部が掌握する全学事業で、同本部から委託されて留学生センターが実際の企画と実施を担当している。全学事業であることから、2009 年度から 2011 年度まで、大学執行部役員(学長、理事、監事、副学長)とサマースクール参加学生との昼食会を行っていた。しかし、2012 年度から、当時の国際戦略本部の経費削減最優先の方針により、昼食会は中止されていた。しかし、今年度大学執行部が一新されたことから、同昼食会の再開を国際戦略本部長に提案したところ、了承が得られたため再開に踏み切った。当日は学長をはじめとした 9 名の役員が出席した。出席の役員からは大変好評で、なぜこのようなよい会が過去 2 年間開かれなかったのかと疑問を呈されるほどであった。

昼食会に対する態度からも分かるように、今年度からの新執行部は、本プログラムの価値を認め、本学の重要な活動として位置付けている。それが具体的に示されたのは、プログラム期間中参加学生が滞在する岐阜大学学外合宿研修施設(以下学外研)の視察と改善対応である。学外研にインターネット環境がないこと、備品の破損が激しく交換・補充されないこと、大学としての管理が不十分であることを話したところ、早急に視察が入り、担当理事間で備品整理や管理体制について改善が図られることとなった。学外研は本プログラムだけのための施設ではないので、全学の利益のために改善が図られて当然である。過去には取り上げられることがなかった学外研の現状についての訴えに、素早い対応が取られることになったのは喜ばしい。大いなる前進であると言える。

② 宿舎チューターへのコメント

本プログラムの参加学生はキャンパスから離れた学外研に期間中滞在するが、学外研の管理人は平日日中しかいないため、参加学生の夜間および休日の安全を考えて、岐阜大学の日本人学生が宿舎チューターとして毎晩宿泊している(1 晩あたり 3 名)。今年と同チューターは全 13 名で、昨年度までにチューターをしたことがある経験者が 7 名、今年初めての新人が 6 名であった。彼らの活躍は単に宿舎に泊まるということに留まらず、よき友人、アドバイザーとして本サマースクールに欠くべからざる存在となっている。毎年度参加学生からは彼らに対して賞賛の言葉が送られ、今年度も学外研にチューターがいたことについて高い評価が得られた(「とてもよかった:14 名、良かった:6 名、ふつう:1 名、筆記アンケートによる)。

しかし、今年度の参加学生はさまざまに辛口のコメントを残しており、チューターについても例年にはないコメントがあった。人数が多すぎる、同じ人が繰り返しチューターになるのはよくない、若い学年のチューターは浅いコメントしか言わないから良くない等である。人数については、13 名というのは確かに例年の 12 名よりは多い。絞る必要はあるかもしれない。本チューターには、毎年度先輩が新人を指導して育てていく側面があり、新人ばかりを採用するのは、大学が依頼する事項(参加学生の安全確保や緊急時の避難所への引率等)を考えて不可能である。若い学年のチューターというのも、いわば技能の伝承という点で必要不可欠である。1 年次または 2 年次から継続してチューターを務める学生の存在がなければ、本プログラムが順調に進むことは考えら

れない。来年度のチューターには、浅いコメント(背が高い、かわいい等の外見に関わるコメント)に対する嫌悪感が示されていたので、そのようなコメントを自重するように求めたい。これらの言葉は、褒め言葉として教職員も学外者もつい口にする言葉であろうことから、留意が必要なのはチューターに限らない。

チューターに関する例年になく厳しいコメントとして、郡上プログラム期間中にチューターが郡上に来ることについての意見があった。郡上プログラムは郡上踊りの踊り発祥祭の週末に合わせて実施するが、その発祥祭にチューター有志が内緒で遊びに行き、参加学生を驚かせるという趣向がここ数年続いている。昨年度まではチューターの突然の出現に喜ぶ参加学生ばかりだったが、今年度は郡上ではホストファミリーと過ごすのだからチューターは来ないでほしいという意見があった。チューターが郡上に行くのは大学が彼らに依頼した業務ではなく、あくまでも彼らの自由であるため、大学がそれについて云々するのは筋違いだと思うが、チューターとは本件について情報共有をしておく所存である。

③ JASSO 奨学金

本プログラムは、「平成 24 年度留学生交流支援制度(ショートステイ)」、「平成 25 年度留学生交流支援制度(短期受入れ)奨学金」に引き続き、今年度も独立行政法人日本学生支援機構(Japan Student Service Organization、略称 JASSO)の「平成 26 年度留学生交流支援制度(短期受入れ)奨学金」に採択された。本奨学金は、個々の学生が申請するものではなく、プログラムとして申請し採択されるものである。昨年度は、本プログラムが正式な単位として認定されるルンド大学についてのみ申請したが、今年度は木浦大学でも同校の定める海外語学研修として本プログラムが単位認定されることが確認できたので、併せて申請した。幸い今年度も採択され、1 か月あたり 1 名 8 万円が支給されて参加学生の大きな助けとなった。

しかし、微妙な問題が生じていたことをここに書いておきたい。昨年度までは採択されたプログラムの参加学生全員に奨学金が支給されたが、今年度は参加学生中成績上位 80%の者への支給となり、ルンド大学参加定員 17 名のうち受給者は 13 名、木浦大学については 5 名中 4 名となった。木浦大学は、定員 5 名のところ参加学生が 4 名だったので結局は全員受給となったが、実は受給者が 4 名ということが参加人数を決してしまっただけである。ルンド大学に対しては、奨学金採択が決定した時点で同校担当者に 13 名しか受給できないことを説明し、事前に参加学生に通達を徹底してもらった。参加学生もルールはルールであると納得していたため、表立っての訴えはなかったが、終了時のアンケートや JASSO に提出する学生報告書によると、受給できる者とできない者がいることは、参加学生の間には緊張感を生じさせていたようである。奨学金は成績上位者から支給されており、受給できなかった者に対して不公平だというより、受給した者が努力にふさわしいメリットを得たと考えるべきであることは理解している。しかし、今年度のルンド大学では、サマースクール参加希望者が 41 名おり、そこから成績上位者として選ばれた 17 名であったことを考えると、13 名と 4 名に 16 万円(8 万円×2 ヶ月)かゼロかの差をつけることは、酷であったというのが正直な感想である。

JASSO 奨学金については、プログラム終了時に学生に報告書を執筆してもらおう。これは JASSO に提出するもので、このプログラムで学んだこと、今後の進路への影響等、執筆項目が定められている。この報告書を日本語で書くことを日本語授業の作文活動としている。本プログラムのフィードバックとしては、従前から筆記アンケート、まとめの会での口頭アンケートを実施しており、これに JASSO 報告書が加わり、参加学生はそれぞれ目的が異なるとはいえ、3 回もアンケートに答えさせられることとなり、若干うんざりという顔をしている者がいた。質問内容が重なるものもあり、もし次年度も同奨学金に採択された場合はフィードバック聴取方法・回数を工夫する必要がある。

④ ルンド大学担当者

本プログラムに最大数の参加学生を送っているルンド大学では、同校人文学部言語文学センターの日本語学科の教員 1 名が、全面的かつ献身的に参加学生に心を配り、岐大の便宜も図ってくれており、それが今年度までの順調な実施の大きな要因となっていた。煩雑を厭わない精力的な活動に、岐大としても大いに感謝している。その担当者が、今年 8 月末で定年退官した。業務の引継ぎは十分していただけるものと思うが、仕事というレベルを超えての参加学生への配慮、本学担当者との厚い信頼関係を思うと、次年度以降も今年度までと同様につつがなく実施に漕ぎつけられるか、若干の不安があるのが正直なところである。岐阜大学としては、来年度以降も最善を尽くすのみである。

ルンド大学とは、岐大が実施するサマースクールに対応するものとして、先方でも同様の短期のプログラムを開講してもらえないか交渉していた。夏は無理だが、2 月または 3 月の時期のスプリングスクールなら可能であろうという話になっていたが、結局のところ、ルンド大学の授業数と人件費の関係で実施が不可能だという返答が本年 6 月にあった。実施に向けて岐阜大学の学生にアンケートに答えてもらうなどしていたが、このような結論になり残念である。今後はサマースクールのような短期プログラムとは違う方向での両校の交流を深める方策を考えていくべきであろう。

今年度のサマースクール全般についてのアンケート結果は、「とても良かった:13 名、良かった:8 名」であった(全回答者 21 名)。例年よりはシビアな意見を言う参加学生だったが、全体としては満足度が高かったのは何よりであった。

今年度のサマースクールも、多くの方々に支えられて、無事全日程を終えることができました。エクスカージョンでお世話になった郡上、美濃、土岐の皆様にはお礼を申し上げますと同時に、今後も変わらぬご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

サマースクール参加学生をはじめとした岐阜大学の留学生に、本物を体験させるためのワークショップをお願いしている能の味方團先生・田茂井廣道先生、狂言の山口耕道先生・茂山良暢先生には、今年度も快くお引き受けいただきました。今年度は能と狂言の同日開催という新たな試みでお手数をおかけしましたが、おかげさまで大成功と言ってもよいものとなりました。どうもありがとうございました。

サマースクール参加学生が居住する学外研(学外合宿研修施設)では、管理人岩松明美さんにお心配りをいただき、13 名の宿舎チューターズには友人として、相談相手として、模範として、活躍してもらいました。お世話になった皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

ルンド大学人文学部言語文学センター日本語学科の鈴木ルンドストロム和代先生には、長きにわたってサマースクール関連でさまざまのご配慮、ご助力をいただきました。先生の細やかなお心遣いにご尽力がなければ、ルンド大学からの皆さんをこのように毎年度受け入れることはできなかつたと感じております。先生のご退官後も本サマースクールが無事に継続できるよう最善を尽くしてまいります。どうもありがとうございました。

来年度のサマースクールも、今年度の参加学生からのフィードバックを生かして、よりよいプログラムを構築できるよう、努力する所存であります。(文責:サマースクール受入コーディネーター土谷桃子)

2014 年度 岐阜大学サマースクール(受入) 日程表

	行事	日本語クラス		行事	日本語クラス
6/2 M	8週間コーススタート		6/29 S		
3 Tu			30 M		◎
4 W	8週間コース開講式・ ガイダンス・歓迎茶話会		7/1 Tu		◎
5 Th	日本語授業開始	◎	2 W	事前講義(能楽・旅行)・ 能楽ワークショップ	◎
6 F			3 Th	1泊旅行(~4)	
7 Sa			4 F		
8 S			5 Sa		
9 M		◎	6 S		
10 Tu		◎	7 M	日本人学生合同授 業、ホームステイガイダンス	◎
11 W		◎	8 Tu		◎
12 Th	美濃エキスカンション	◎	9 W		◎
13 F			10 Th		◎
14 Sa			11 F	郡上プログラム(~14)	
15 S			12 Sa		
16 M		◎	13 S		
17 Tu		◎	14 M		
18 W		◎	15 Tu		◎
19 Th		◎	16 W	相撲事前講義・日本 語筆記試験	◎
20 F			17 Th	相撲観戦	◎
21 Sa			18 F		
22 S			19 Sa		
23 M	土岐エキスカンション	◎	20 S		
24 Tu		◎	21 M	(海の日)	
25 W	4週間コース開講式・ ガイダンス	◎	22 Tu	日本語授業最終日	◎
26 Th	役員昼食会	◎	23 W	まとめの会・修了式・ 歓送会	
27 F			24 Th	宿舎大掃除	
28 Sa	4週間コース学生 歓迎パーティー				